体験談シリーズ

親子編

この子の笑顔を信じてみよう

そう気づいたとき、娘は変わり始めた

奈良県　田中敏子さん（56歳）　里奈さん（25歳）

親子なのだから分かってくれるはず。そんな親からの一方的な思いが、親と子の間に大きな溝をつくってしまうことがある。

田中敏子さんは、一人娘の里奈さんのことを誰よりも愛し、娘のために尽くすことが親としての自分の責任だと信じていた。

黙って側にいて、話を聞いてあげるそれだけでよかった

敏子さんは結婚2年目のときに里奈さんを出産。結婚するまで保育士をしていた敏子さんは子どもが大好きで、日々、成長する里奈さんの側にいることが何よりの幸せだと感じていた。しかし、3歳、4歳と少しずつ自我が芽生え始めた頃から、不安を

この子の笑顔を信じてみよう

そう気づいたとき、娘は変わり始めた

抱くようになる。

保育士をしていた私には、3歳になったらこうなる、4歳になったらこうなるという知識が経験としてあるわけですが、里奈は何をやるのも遅い。だんだん心配になってきて、必死でいろいろなことを覚えさせようとしました。でも、里奈はそれがなかなかできなくて、気がつくといつもガミガミ言う親になっていたんです。

小学生になるといくつも習い事をさせた。勉強はもちろんのこと、運動が得意ではない里奈さんをスイミングスクールに通わせたりもした。霊友会のことを知ったのは、そんなときだった。

スイミングスクールで知り合ったママ友から霊友会の話を聞いたんです。その人はすごく優しく、相談にも乗ってもらっていました。この人が勧めることならと思って一緒につどいに行くと、宗教に対する印象が180度変わりました。

猪子靖世支部長から「霊友会は人を思うことから始まる教え。一緒にやりませんか」と言われて、すごくいい教えだなと思ったんです。

だが、信頼を寄せていた支部長からでも、敏子さんには譲れないことがあった。それは娘の里奈さんの育て方についてだった。

私はマイペースでおとなしい里奈のことが心配でした。他の青年部の子たちのように、里奈も活発でリーダーシップがとれる子にしたいと思っていたんです。支部長にそんなふうに言うと、「田中さんは娘さんにあれこれ言いすぎる。娘さんから何か言ってくるまで、我慢することも必要なのよ」と、いつもそう言われていたのです。

でも、その言葉を受け入れることができませんでした。娘のことを誰よりも知っているのは親の私。子どものことを心配するのは親として当然と、心の中でそう思っていたんです。

敏子さんは、里奈さんが、その日、学校に着ていく服さえ自分で決めてしまうほどで、身の回りのことは何でもしてしまっていた。中学生、高校生、大学生になっても

この子の笑顔を信じてみよう

そう気づいたとき、娘は変わり始めた

敏子さんは里奈さんのために世話を焼き、それが当たり前のことだった。

だが、里奈さんは必死に自分自身と闘っていた。親という存在を乗り越えようともがき、それが思わぬ行動になって現れる。

遊園地ではしゃぐ幼い日の里奈さん（右は敏子さん）

大学卒業を間近に控えた頃でした。娘は卒論の提出が遅れ、就職活動もうまくいかず、その不満が一挙に私に向けられたのです。娘は私にこう言いました。「私は何もできないダメな人間。生きてる価値なんてない！　でも、こうなってしまったのは全部お母さんのせいなのよ!!」と。

このまま何も言わないままでいいのかなと不安になったりもした

里奈さんはその日から一歩も家を出なくなってしまった。ときどき何かを食べている様子はあったが、自分の部屋に閉じこもったきり。何の物音もしない。生きているのか、死んでいるのかも分からず、偶然、ドアの隙間から見えたのは、携帯を片手にずっと天井を見上げている里奈さんの姿だった。

このままだったら、本当にこの子は死んでしまうかもしれない。そう思ったとき支部長の言葉にもう一度耳を傾けてみる決心がついた。

成人式を迎えた里奈さん

支部長の言うことをきかなかった結果がこれでしたから、叱られる覚悟はできていました。しかし、支部長は一切私を責めず、優しく、「里奈ちゃんもあなたも辛いだろうけど、ここを乗り切れば里奈ちゃんは必ず変わる。里奈ちゃんは今必死に自分と闘ってるんだから、それを見守ってあげましょう」とおっしゃったのです。

そして、「今はとにかく辛抱のとき。自分の言いたいことを抑えて、里奈ちゃんから何か言ってくるまで我慢よ」とアドバイスを受けました。

この子の笑顔を信じてみよう
そう気づいたとき、娘は変わり始めた

親にできることは何かあったら精いっぱい支えてあげること

里奈さんに変化が現れたのは、それから1カ月余りが経った頃だった。

ある日、里奈が台所に立ってたんです。珍しいなと思って、「お腹でも空いたの？」と聞くと、「お父さん、お母さん、これ、私が作ったんだけど食べてみる？」と言ったんです。思わず夫と顔を見合わせてしまいました。私と夫が「おいしい」と言ったら、少しだけ里奈が笑ってくれました。

それから気が向くと料理を作るようになった里奈でしたが、相変わらず部屋に閉じこもることも多くて、このまま何も言わないままでいいのかなと不安になったりもしました。しかし、このときはときどき笑ってくれる里奈の笑顔だけを信じて、このままでいいんだ、このままでいいんだと、自分に言い聞かせていたんです。

それから里奈さんは少しずつ自分のペースで自分の人生を歩み始める。大学を卒業してもしばらくは家にいたが、その年の8月からハローワークに通い出して、就職を決めた。その会社は今年で3年目になる。

私がガミガミ言っていた間、夫は何も言わず娘に寄り添ってくれました。主人がいてくれなかったら、もっと大変なことになっていたと思います。私は誰よりも娘を愛していると思っていたけど、独りよがりの愛情を押しつけていただけだったのかもしれません。

期待に応えようとする娘には重荷でしかなかったのに、私は肝心な娘の気持ちに気づいてあげられませんでした。この経験を通して私は、親にできることはいつも側にいて、何かあったら精いっぱい支えてあげることなんだと、ようやく気づくことができたんです。

（次ページに続く）

敏子さんと里奈さんは親子のつどいを開いている

この子の笑顔を信じてみよう
そう気づいたとき、娘は変わり始めた

娘、里奈さんが語る

幼い頃の母親の印象を里奈さんに尋ねた。

私が何かする前に母がしてくれるから、私は何もする必要がありませんでした。母の言う通りにしていればいいだけで、だんだん自分で考えるということもしなくなっていったんです。私は引っ込み思案で友達と遊ぶのも苦手でしたから、それでなんの問題もありませんでした。

しかし、思春期を迎えると何もできない自分にコンプレックスを感じるようになっていく。

母は私にもっと積極的になってほしいと思っていろいろ言ってくれるのですが、その期待に応えようと努力しても、それができず、否定されるのがいやでした。そして、しだいに私ってダメな人間なのかもしれないと考えるようになっていったんです。すると、ますます消極的になっていきました。

ずっとそんなコンプレックスを抱えて育った里奈さんは、ある日突然、自分の感情を抑えられなくなってしまう。そのときの気持ちを聞こうとすると、目にうっすら涙を溜めながら胸の内を話し始めた。

母の期待が私を追いつめていった

もうすべてを投げ出したい気持ちでした。自分がこれからどうなるのか将来が全く見えず、暗いトンネルの中にいるような気持ちだったんです。自分では何も考えられず、こんな人間になってしまったのは全部母のせいだという思いでいっぱいでした。

そんな里奈さんが変わるきっかけはどこにあったのか?

母が霊友会に入会したときに私も一緒に入会しました。でも、心の中でずっと反発していました。母はきっと私に青年部のリーダーの子たちのようになりなさいと

この子の笑顔を信じてみよう
そう気づいたとき、娘は変わり始めた

思っているに違いない。そんな気持ちが伝わってきて、いやでたまらなかったんです。

でも、猪子支部長のことは大好きで、陰でよく相談に乗ってもらっていました。支部長からはよく「お母さんはあなたのことが大好きなの。それだけは忘れないでね」と言われていました。心が苦しくなると、支部長から、そんなときはお経をあげてみなさいと言われていたので、一人でお経をあげていました。

その中でだんだん母の気持ちを考えられるようになっていったんです。母が一方的に悪いと決めつけていたけど、大好きな我が子にひどいことを言われて、本当はどんな思いだったんだろう。母が何も言わなくなって私は初めて自分の意志で考えるようになり、自分にも甘えていたところがあったのではと思うようになりました。そして、少しずつ自分はこれからどうすればいいんだろうと前向きになることができたのです。両親に料理を作ったのも、今思えば、母に認めてもらいたかったからなのかもしれません。

お母さん、私はもう大丈夫！

里奈さんがだんだんと変わり始めた頃から、支部長の提案で、時間を見つけては、親子のつどいを開くようになった。

最初は里奈さんが敏子さんに不満をぶつけることが多かったが、それこそが大切な時間だったということが、最後に紹介する里奈さんの言葉からも分かる。

母も変わってきてくれて、私自身も母とのつどいの中で、心の中を全部吐き出すことができて、気持ちが前を向くようになったんです。これまではどちらかが一方的に言葉をぶつけることしかしてこなかったけど、これからはちゃんと自分の気持ちを伝えるだけではなく、母の気持ちにも耳を傾けていかなければと思うんです。今は母が誰よりも私のことを愛してくれていると感じています。

仕事もそうだけど、霊友会の教えや、いろいろなことに一生懸命になって、会員の人や支部の仲間とともに幸せになりたいと思います。

その言葉に大きく頷く敏子さんだった。

『あした21』2019年10月号から

2021.4 発行
霊友会